法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2024-12-26

<新刊紹介>東喜望著『沖縄・奄美の説話と伝承』

岩見，清一 / イワミ，セイイチ

(出版者 / Publisher)
法政大学国文学会
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
日本文學誌要
(巻 / Volume)
61
(開始ページ / Start Page)
109
(終了ページ / End Page)
110
(発行年 / Year)
2000-03-24
(URL)
https://doi.org/10.15002/00020111

東喜望著

『沖縄・奄美の説話と伝承』

岩見　清一

この著書はたんなる「説話」の紹介ではない。「文明の極度な発達が自然を破壊し、生態系を変え、地球環境を崩壊の危機に追い込もうとしている現代」にあって「未開の『辺境』に生き抜く人々の中に「人間の生の原点」を見極め、説話を受け継いできた社会の構造を探ろうとするものである。

「未開の『辺境』に生き抜く人々」とは、南島びとのことであり「南島は古代以来、偏見と差別を受けており、一九四六年(昭和二十一)北緯二十九度以南が米軍の信託統治下におかれ、日本の中で唯一他民族支配を受けた。そのために現在においても政治的経済的格差は存在する」が、「南島びとはじつに明るく、のびやかで、山や森、川や海、泉や井戸、火や太陽などを神々としてあがめ、自然とともに慎ましく生きている」のである。

この琉球諸島の基本的な村落構造、信仰体系、極限状況の中でたくましく明るく生きる島びとの姿を描いているのが、著者の徳之島に疎開した二年間の体験に基づいて書かれた冒頭の「古層のムラの民俗誌—異郷から原郷の発見へ」である。

一九四三年、戦況が悪化するとともに食糧事情が悪くなり、そのうえ父の休職、妹の死と重なって、両親の故郷徳之島徳和瀬に疎開する。そこは神戸に生まれ育った十一歳の少年の著者にとってはまさに「異郷」の地であった。

亀徳港に着くと海岸まで伝馬船(一艇艪)で運ばれ、迎えに来ていたほとんどの人は裸足であった。妹の遺骨は死霊の宿す穢れたものとされすぐに墓に埋葬された。祖霊信仰に基づく「神道」の地であったのだ。学校では「ヤマトムン(大和者)」とイジメられ蔑視された。子供たちの喧嘩も二派に分かれ、大人社会そのままであった。

一九四五年三月下旬、大島中学校(名瀬)受験、合格したが、中学校は閉鎖目標になり、五月下旬、ようやく軍都の上陸用舟艇で、深夜、アメリカの偵察機をさけながら徳之島に帰ることができたが、ムラの三分一は空襲で破壊されていた。そして九月十七日、枕崎台風でほとんどの家が倒壊する。この惨状に「私は戦争と野蛮な自然を憎み、常にその脅威にさらされるこの島を嫌った」が、ムラの人びとはひるむことなく、労働の貸借関係「結(ゆ)い」の制度の下でみごとに復興させる。「原郷」の発見である。

徳和瀬は祖霊信仰に基づく素朴な「神道」のムラ(穢れ・鎮魂・墓所)で、甘藷を主食とする過酷な労働に明け暮れる生活(集落の位置・形気・生活)である。子供社会にもヤマトムンに対する蔑視、集落の対立がそのまま反映しており(学童のいじめとハンタイ)、氏族相互が械闘をくりひろげたと思われる古戦場跡がある(ヤッケ山「喧嘩山」・械闘・遊戯)。疱瘡に苦しめられ(病まいと呪禱)、死者に対してはクヤ(供養歌)を歌う(岬マチ・ユガラ・火の鶏・葬制)。魚はその日に必要な分しかとらない(海の生活)。

そしてムラは「メェンバレ(前原)」「ウンバレ(上原)」「クシンバレ(後原)」の三つの集落に分かれていて、「メェンバレ」と「クシンバレ」との間に感情的対

立がある。

この対立が顕著に表われるのは、年中行事のなかでもっとも賑やかな「浜下り」の祭りのときである。遠祖以来決まって同じ血縁の人々が、それぞれの「浜下り宿い」を造り、祝うからである。このような対立をはらみながらも海の彼方の浄土「ニライ・カナイ」から「ヒ（火・日）ぬ神」と祖霊を招いてまつり収穫の感謝と翌年の豊作を祈願する。これはムラびとが、自然に対する畏敬の念で一致しているからこそ「共同の運命や利益」を共通に担うことができるのである。そして華やかな「七月踊り」を踊るのである。

この基本的な村落構造をふまえて「徳之島の伝説と昔話」「渡名喜島の実話・伝説・昔話」「与那国島の伝説とその背景」「失われた集落・浦添小湾の民話」では、それぞれの島の構造と説話を紹介している。

「南島の霊洞文化と太陽信仰」の太陽信仰は世界的であることを論証している。

「波照間島出身の英傑と異人・渡海伝承」「西表島・祖納の豪族伝承」では豪族の出現は対外貿易によるものであり、赤蜂の乱、混血児ゲート・ホーラ、人頭税から逃れるために脱島した島びとなどが歴史的に考察されている。

「薩南諸島の疫病と琉歌」では、病魔に苦しめられる島びとと「琉歌」を生み伝える島びとの心が描かれる。琉歌「天然痘の歌」は憎むべき「疫病神」をたんに追い払うのではなく、歌を捧げ怒りをやわらげてもらおうとするものであり、ここに「『宣』を媒介にして、恐るべき悪疫に対してさえこのような芸文を拓いたうるまの民の、のびやかな心性と歌心」がある。だから「新たな視点から見なおすべき価値を内包している」。とひとつの方向性を指し示している。

（いわみ　せいいち・一九六八年修士課程修了）

▽九九年四月・おうふう・二二〇〇円

△著者＝一九六五年修士課程修了